



♠♥1章目

いきなり女の子になって!?

P5



♠♥2章目

ブルマでおもらし!

P45



♠♥3章目

晶のわざとおもらし！

P97



♠♥4章目

晶の穴開オナニー！

P133



♠♥5章目

スクール水着で溶けあって! P199



♠♥6章目

押し倒されて——。
恋人宣言! P287



♠♥エピソード

変わっていく日々 P345

♠♥晶の公開オナニー

「イッ、イッちゃう……！ ダメ……止められ……な……イイッ！ イッッッちゃ……ううう！」

グチュッ、グチュチュッ！
ジュブブッ、じゅぷっ、じゅぷぷっ。

ついに我慢できなくなったのから、晶はショーツのなかへと手を入れるとグチュグチュと自らの股間をかき鳴らす。

ショーツからは白濁した本気汁が溢れ出してきていて、お尻のほうまでぐしょ濡れになっている。

それはおもらしをしたときよりも大変なことになっていた。

「白くて濁った汁も溢れ出してきてるみたいだけど、これはなんなんだ……？」

「そ、それは……ううっ、女の子が……はううっ！ イキそうに……なった、ときにい……ッッッ！」

「い、イキそうなのか!？」

司の問いかけに、晶は顔を真っ赤にして何度も首肯する。

どうやら絶頂がすぐそこにまでやってきているらしい。

「ううっ！ 本気のお汁が……っお尻のほうまで広がって……あっあんっ熱くなって……っ痺れる……っ溶ける……！」

グチュチュッ！

じゅぷっ、じゅぷっ、じゅぷぷっ！

淫猥でネットリとした水音が浴室に蒸れ返る。

狭い浴室は、晶の股間から発散されるヨーグルト臭に満ち溢れていた。

それでも晶の指先は止まらずに――、

カリッ。

ショーツのなかで、固い真珠を引っ掻いたのだろう。

それが合図だった。

「くっ、くううう～！」

晶は、唇を噛みしめて顔を伏せる。
だけど M の字に開脚したままの股間
は丸見えになっている。

ブジュリッ!!

黒タイツに隠されている股間から、や
や下品な音が鳴り響くと、

ドプ……ッ。

大量の白濁汁が溢れ出してきた、会陰
を伝って床へと広がっていく。

どうやら汁が多いという晶の言葉は本
当のようだった。

なにしろ、愛液や本気汁で、晶のお尻
を中心として大きな水たまりができあ
がっていたのだから。

「んっ、ふううううっ！」

ガクンッ！ ガクンッ！
ブジュッ！ ブジュジュッ！
……どぷぷっ。

それでも晶の絶頂は終わっていない。
クレヴァスをうねらせ、白濁した酸っぱい淫汁を撒き散らしながら絶頂している。

「くっ、くうう……っ、止まらな、い……！ ダメ、これ以上イッ、イイイッ、イッちゃうと……あっアアン！」

ぷしゅっ！
しゅわわわわわわわわわわわわわわわわ！

それは、突然噴き出してきた。
くぐもった水音が鳴り響くと、サラリとした黄金水が噴き出してきたのだ。

その勢いたるや、クロッチと黒タイツという三重の障壁を突き破って噴き出してくるほどだった。

シュイイイイイイイイイイイ！
もわっ、もわわっ。

女の子の尿道は、太く、短い。
それに膣口のすぐ脇に尿道が通っているから、快楽を得ようとするとどうしても刺激されてしまう。

だから尿意がこみ上げてくるのは当然のことなのだろうけど……その様子を目の当たりにした司は、晶の股間に視線が釘付けになっていた。

「女の子って、こんなに激しく絶頂するの……!?!」

こうして目の当たりにすると、その激しさに信じられなくなってしまう。

男はちんこを痙攣させて射精すればそれでお終いだけど、女の子の絶頂はまさに全身を使っていた。

それに失禁までして絶頂を極めているだなんて。

男は、こんなに激しく絶頂しない。

「んっ、ふうっ！　ううっ！　イッ、イッちゃう……！　まだ……ああん！　イッ、いぐ！」

キュンッ！　キュンッ！
プシャア……、プッシャアアアアア！

晶のクレヴァスがうねるたびに黄金水
や本気汁が溢れ出してきている。
ツーンとしたアンモニア臭が浴室に満
たされ、その恥臭さえも晶にとっては官
能のスパイスとなっているのだろうか？

「くっ、くうっ」

がくっがくっ！ がくんっ！
ぷっしゅうう……！
ぷっしゃああああ……!!

晶は尻餅をついてM字に開脚させると
いう恥ずかしいポーズのままで、腰にバ
ネが仕掛けられているかのように痙攣さ
せている。

その痙攣のたびにクレヴァスからは淫
汁や小水が噴き出して、大きな水たまり
となって広がっていった。

「んっっ、ふううっ！ うっ
ぐう……っ、まだ、まだ……イッッ、
イッちゃう……ううっ！」

しゅわわわわわわっ！
じゅぷぷっ！ じゅももももももも！

失禁しながらも、晶は欲望を貪るかの
ように、自らのクレヴァスの深いところ
にまで指を食い込ませていく。

晶の頬は紅潮し、官能に弛緩してい
た。

それでも股間からは熱いヨダレが溢れ
出してきていて、見る者の理性を溶かそ
うとしてきているようでもあった。

(こんなに……激しいなんて……)

司は絶句してしまう。

普段は無表情で、氷のようにクールな
幼なじみに、こんなにも情熱的な一面が
あったなんて。

スカートの中に、本能のままにうね
る器官が隠されていたなんて。

(俺も、こんなに激しくイク……の
か!?)



それは、にわかには信じがたい現実だった。

もしもこんなにも激しくクレヴァスをうねらせて、ドロドロの体液を分泌し、更には失禁しながら絶頂したら、気絶してしまうに違いなかった。

それに腰もバネのように痙攣している。

それも一度だけではない。

何度も。

何度も、だ。

男は射精すれば絶頂が終わるけど、女の子はザーメンのすべてを受け止めなくてはいけないから、それだけ絶頂が長く続くということなのだろう。

「ひっ、ひい……っ」

女の子座りして晶の絶頂に見入っていた司は、驚愕のあまりに後ろにひっくり返りそうになって――尻餅をついていた。

ぺったりとお尻をついている床が、妙に冷たく感じられる。

意図せずに、無防備に足を開いてしまっていた。

むわっ、むわわ……っ。

司のスカートが捲れ上がって、水色と白のしましまショーツが丸見えになっている。

そのクロッチは既に濡れそぼり、おまたに食い込んでヒクヒクと痙攣していた。

「あっあああ……」

気がつけば——、
じゅわっとおまたが生温かくなって、お尻のほうにまで広がっている。

しゅiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii……。

司は、恥ずかしい水音を立てながら失禁していた。

それは司自身も気づかないうちに。

おしっこの温もりにおまたも、お尻も溶かされていていき、ただでさえ弛緩しているおまたが更に弛緩していく。

しゅわわわわわわわわわわわわわわわわ……。。

「あっ、あああっ」

ヒクンッ、ヒククンッ。

しゅいい……。っ、

しゅわわわわわ……。っ。

頼りなくヒクヒクと痙攣する司のおまたからはおしっこが漏れ出してきていて、お尻を中心として大きな水たまりが広がりつつあった。

「ああ……。司ったら、私のえっちなところを見ておもらししてしまったの？」

「えっ？ ええ？」

晶に指摘されて、このときになって司は自らが失禁していることに気づいた。

だけどどんなにおまたに力を入れても、一度漏れ出してきたおしっこを止めることはできない。

ただでさえ、女性器に慣れていないのだ。

尻餅をついて、ただ小水を垂れ流すより他ない。

「あぁっ、そんな。小便漏らすなんて……っ」

キュンッ！ キュウウッ！
しゅわわわわわわわわわ……。

どんなにおまたに力を入れても、おしっこは漏れ出してきていて、ツーンとしたアンモニアの湯気を上げている。
そんな司を見て、

「ごめん、司。我慢できない」
「えっ？」

突如、晶からの謝罪。
一体何故？
首をかしげようとした、その瞬間だった。

「あっ」

司の短い悲鳴。

その瞬間、司はなににもできなかった。
なにしろ晶が抱きついてきたかと思っ
たら、ギュッと抱きしめられていたのだ
から。

大胆にも両手両脚を巻き付けてきて、
だいしゅきホールドになっていた。
意図せずに、対面座位になっている。

「晶の身体、熱くなってる……っ」

「うん。知ってる」

晶の身体は、とろけそうなほどにしっ
とりと熱くなっていた。

それにビクッ、ビククッ！ いまだ絶
頂が収まらないのか、全身を使って痙攣
している。

「司が可愛すぎるのがいけないんだから」

耳元で囁きかけられる。

制服越しだというのに、二人の身体が
溶けあっているかのような、そんな錯
覚。

「ごめんなさい。先に謝っておく」

ぶるるっ。

晶が小刻みに身体を震わせる。
その数秒後――、
司の下腹部が、生温かく濡れていく。

しゅiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii……。

くぐもった水音。
それは晶の股間から噴射される生温かい
黄金水のせせらぎ。
生温かな水流は司の下腹部を溶かして
いくと、おまたをイタズラっぽく撫で回
していく。
その感触に、司が耐えられるはずもな
かった。

「あっ、あああっ」

しゅわわわわわわわわわわわわわわ……。

晶にだいしゅきホールドで抱きしめら
れている司は、再び失禁していた。

しゅいいいいいいいいいい……。

しゅわわわわわわわわわわ……。

少女二人の恥ずかしい水音が重なり合い、混じり合っていく。

二人を中心として、とろみがかかったおしっこが広がっていくと、ツーンとしたアンモニア臭が湯気となって立ち昇っていく。

「あっ、ううっ、晶のおしっこ……あったかい……」

「司のおしっかも温かいの。……んっ」

晶はなんの躊躇いもなく四肢を巻き付けて抱きついてくる。

しゅいいいいいいいいいい……。

しゅわわわわわわわわわわ……。

生温かいおしっこが蕩け合い、制服や下着へと染みこんできて、おまたは熱い蜜で濡れそぼる。

司のFカップと、晶のFカップが蕩け合い、低反発枕のように潰れていき、

「ううっ、なんか……おっぱいがムズムズするう……っ」

「女の子はおっぱいでも感じるの。ちゃんと慣れておかないと」

「そ、そんな……っ。俺は男、男だ……っ」

「ふーん。それじゃあ、おしっこ止めてみなさい」

「む、むりい……」

しょわわわわわわわわわわわ……。

しょおおおおおおおおお……。

二人を中心としておしっこの湖が広がっていき——、やがてそれは排水溝へと流れ落ちていく。

それでも二人はお互いの身体を密着させるように抱きしめ合っていた。

お互いの熱が引くまで、ギュッと……。

体験版はここまでです！

ここまで読んでくれて、
ありがとうございました！

次ページから、
おもしろイラストを大掲載！

楽しんでもらえたら嬉しいです！

大決壊シリーズ 各種 DLsite で配信中



大決壊

TS俺が百合墮ちするまで



大決壊!

おもらしカノジョが
妊娠するまで



